第２回　教育体制検討会議議事録

招集日時	平成25年9月18日（水曜日）　午後1時30分開会／午後3時12分閉会
招集場所	加賀市役所別館3階　301会議室
出席者	清水潔顧問、寺西盛雄顧問、松田章一顧問、笹原忠義顧問、寺前市長、 上田教育委員長、石橋委員、酒谷委員、畑中委員、旭教育長、 掛山事務局長、網谷次長、梶谷教育庶務課長、米屋教育庶務課長補佐、 宮永学校指導課長補佐、岡田学校指導課係長、越中谷学校指導課指導主事

旭教育長　みなさんこんにちは。定刻となりましたので、ただ今から第2回加賀市教育体制検討会議を開会いたします。顧問の皆様方におかれましては、ご多用のところ、また遠方より加賀市までお越しいただきまして誠にありがとうございます。開会にあたりまして、上田加賀市教育委員長があいさつを申し上げます。

上田委員長　顧問の皆様こんにちは。本日はお忙しいところを大変ありがとうございます。記録的な猛暑の夏に続き、一昨日の台風 18 号による大雨と強風は、日本各地に土砂災害などの大きな爪痕を残していきました。ここ加賀市におきましても、柴山潟に面する片山津温泉街が浸水しまして、2 千世帯に避難勧告が出されるなど、私達も大変不安な一日を過ごしました。一転して昨日からは秋晴れの台風一過、大変素晴らしいお天気に恵まれまして、今日を迎えることになりました。さて、顧問の皆様には6月の初回に続きまして、2回目となる本日の加賀市教育体制検討会議にご出席をいただきまして誠にありがとうございます。前回は加賀市の学校教育の現状につきまして、顧問の皆様方からそれぞれのお立場からのご感想や貴重なご意見を賜りまして、私ども委員一同心から感謝をしております。7 月に市内の小学校 6 年生、中学校1年生と3年生、それぞれの児童生徒、及びその保護者、また教職員を対象といたしまして、学校適正規模に関する意識調査というのを行っておりますけども、これを参考資料として、私達5名は加賀市の子ども達の集団的学習の場として、どのような教育環境が望ましいのか検討を重ねてまいりました。そして委員会として協議をしている段階でございます。2 回目となる本日は、私達が現在、描いている望ましい教育環境につきまして、顧問の皆様方からご意見やお考えをお伺いし、加賀市の子ども達にとって何が最も相応しいかを検討・審議し、まとめていきたいと考えております。加賀市と加賀市の子ども達の未来のために、どうぞお力をお貸しくださいますようよろしくお願い申し上げます。

旭教育長　ありがとうございました。本日は寺前市長さんにも来ていただいております。一言お願いいたします。

寺前市長　第2回目の加賀市教育体制検討会議に、顧問の方々、遠路お越しいただきまして誠にありがとうございます。私も今、これから次の2期目に向かって、色々政策を整備させていただいております。その中で若者に関する要望といいますか、政策というのが大変重要だということを改めて実感した次第でございまして、教育体制検討会議、若者が夢を持てる教育体制ということで、市民にも訴えかけをいたしております。ぜひともこの加賀市の若者がですね、将来夢が持てるような教育を受けられる場として、どのような体制が相応しいか、ぜひご意見を賜りたいと思います。市内のご父兄のアンケート等、事務局のご尽力により今日はまとめられていると聞いております。まずはその資料等をゆっくり見ていただいてですね、また次の政策に向けてご提言をいただければと思います。本日はお忙しいところありがとうございました。

旭教育長　どうもありがとうございました。市長はこの後、他の公務がございますので、これで退席とさせていただきます。どうもありがとうございました。それでは、検討会議に入りたいと思います。会議に入ります前に、今一度、今ほども話がありましたが、当会の目的等について確認させていただきたいと思います。当会には加賀市の5人の教育委員が加賀市の教育力のレベル向上を目指して、いかにあるべきか。それから加賀市の人材育成、特に医師と教師と公務員等、こういう人材育成が枯渇していっております。どうしたらいいかということ。3つ目は、加賀市の子どもや大人に自信と誇りと意欲を持たせるためにどうしたらいいか。こういうことで検討はしてきておるわけなんですが、県内外の有識者からご意見やご提言をいただき、加賀市の教育体制の整備計画をこれから策定し、市民に公表していきたいと考えているところでございます。そのための検討会ということでございます。そこでこの検討会では、当面する5つの課題についてご討議を願う予定をしております。順番はアトランダムですけども、1つ目は、地産地学の小学校・中学校・高等学校の連携について。2つ目は、少子化を背景とした学校規模の適正化について。本日はこれをテーマにご討議・ご意見いただきたいと考えております。それから3つ目は、市内の中学生の進学希望の実態と高校教育機関の整備について。4つ目は、いじめ体罰への対策について。5つ目は、加賀温泉駅周辺文教ゾーン整備との調整について。このようなところを教育委員会といたしましては課題として、5人でいつも討議しているところでございます。前回の第1回は6月19日に開催されましたが、会議では加賀市の学校教育の現状や教育施策について説明させていただきました。4人の顧問の先生方からは、加賀市の教育全般に関するご意見をいただきました。本日の会議でございますけども、学校規模の適正化をテーマとしてご討議いただくという予定としております。児童数の減少により、集団的教育の場としての学校教育活動に支障をきたしているところがございます。また、危惧もされます。当時のいろんな政治、あるいは地域性、経済的な現状から考えて、子どもにと

って最も望ましい教育環境について、ご意見を賜わればと考えております。教育委員の皆様、そして顧問の先生方、どうぞ活発なご討議のほどお願いいたします。それでは、会議に先立ちまして資料の説明を網谷次長からしてもらいます。

■ 加賀市の学校規模の現状と推移について
■ 加賀市教育体制推進に関するアンケート調査結果報告
網谷次長　資料に基づき概要を説明

旭教育長　それではまだ資料がございますので、この資料について掛山事務局長お願いします。

掛山局長　今ほど網谷次長が説明いたしました、『加賀市の学校規模の現状と推移について』、それから『加賀市教育体制推進に関するアンケート調査結果報告書≪速報≫』を事前に送付させていただいておりますが、本日 5 枚の資料を追加させていただいております。1 枚目は『学校規模によるメリット・デメリット』。これは文科省において作成されたものでございます。それから 2 枚目が『学校適正配置関連法令（抜粋)』を付けさせていただいております。それから 3 枚目が『石川県内における統廃合状況（平成以降)』。県の資料を配付させていただいております。それから 4 枚目が『加賀市の学校統廃合の経緯』。最後 5 枚目、『小中学校の耐震化状況一覧（加賀市)』の以上 5 枚を本日配付させていただいております。

旭教育長　本日わけた資料もございますので、まだお目通しでない物もございますが、後でまたご質問等ございましたらお願いいたします。それでは、会議に入りたいと思います。今の資料説明から、教育委員の皆さんの感想やお考え、疑問に思っていることなどについてお聞きしたいと思います。その後、顧問の先生方からご意見をいただきたいと思います。誠に申し訳ございませんが、時間の関係もございますので、お一人 5 分以内でお願いしたいと思います。それでは、今ほどの事務局側のアンケートの報告と、この問題については我々5 人の教育委員が話し合ってきたんですけども、何かご意見とか感想、疑問点はございませんでしょうか。トップバッターで申し訳ございませんが、石橋委員どうでしょうか。

石橋委員　それでは、トップバッターということで一つよろしくお願いをいたします。今ほど事務当局の方からですね、いろんな資料の説明申し上げました。石川県内、そして加賀市の過去の学校の合併の資料もお手元にあると思います。私自身はこの加賀市の小学校の数、子どもの数の状況を見ておりますと、今のままでは子ども達にとって決して良い教育環境ではないのではないかと

いう思いを持っております。こういうことをやっていこうとした時に、いろんな問題が発生するのであろうと思うんですけども、一番先に疑問に感じているのはですね、文科省の示す基準につきまして、1 学年に最低 2 学級、あるいは 1 学級の人数が 35～40 名という大枠の数字があろうかと思います。これはあくまで1つのクラスにおける子ども達の数の上限であります。ただ、集団学習を学校という場において行おうとする際に、下限を設けてない。最低何人ぐらいはいないと集団学習そのものが成り立たないのではないかということを常々疑問に思っております。ましてや先ほどの書類にもありました、2 つの小学校は完全複式になっております。例えば 1 年生の子ども達に先生が教えている時に、2 年生の子ども達は先に与えた問題を自習するということの繰り返し、それの往復になっている状況になっております。それは学力だけの問題ではなくて、知徳体を含めて全体の話になってきますから、体育の時間においてもひたすら走り回るだけとか、ひたすら縄跳びをするとか、個人スポーツの延長にしかならない。団体活動ができない。学校というものを通じて、当然人間関係を学ぶべきだと思いますし、それがあまり少ない人数のままでは、集団学習自体が成り立たないのではないかと感じております。そうすると、例えば最低 1 クラス 10 人はいるとか、15 人はいないと集団学習にはならないというような基準があって然るべきなのかなというふうに思っておるんですが、現状はないとお聞きしております。この辺に関しましては、特に清水顧問の専門のお話になるかと思いますが、ちょっとご意見をお聞かせ願えればと思います。

旭教育長　すみません、それでは清水顧問、何かおわかりのところがございましたらお願いいたします。

清水顧問　この標準法が定められたのは昭和 33 年ですね。昭和 33 年というのは、まだ今と社会とかいろんな地域の状況が随分と違っているかと思います。要は、上限というか標準というかたち、上限でもない下限でもない標準だよというのが一点でございまして、標準を定めるときの社会状況というのはいわゆるすし詰め学級の問題で、どんどんどんどん、私なんかそうなんですけど、結局、終戦後のベビーブームの世代なんですね。すし詰め学級の時代です。ということで、一時的に相当過大な状況にならざるを得ない。だけどそれは、いずれは少し解消されていくというのがこれまで。そんな時期で、結局すし詰めという場合には非常に過密になる。指導も非常に困難だよねということで、学級編成が標準としたわけですけれども、現実問題として、当時は様々な諸状況は、例えば道路とかその辺りの整備状況、交通手段の状況を一つとっても随分変わってきている。その場合、どうしても学級編成の、じゃあ 12 学級以下はどうなんだ、1 学年 2 学級以下はどうなんだという場合、地域の状況というのは、一律には、全国的ではなかなか対応は困難じゃないだろう

か。つまり都道府県が主導する、あるいは市町村で判断を任される場合、非常に難しい場面が出てくるのではないかというようなことで、ある程度そこはまさに裁量側の判断だろうというのが基本的な考え方だったというふうに承知しています。ただいずれにしても、ベビーブームが去った後で、市町村合併その他で統合問題というのは、常にホットな課題であり続けたと、率直に申し上げるとそこのところがあまりがちがちというかたちにすると、別の意味での問題が生じるだろう。こんなことだったのだろうと思います。

旭教育長　ありがとうございました。いろんな地域によって事情がある。私も東京の友達がおるんですけれども、八丈島でしたか、そこの離島の先生です。そうすると教育の機会均等、一人の子どもでも大切にし、やはり義務教育を教えないといけない。下限と決めてしまうと柔軟な対応ができない。そういうふうな話をしておりました。石橋委員の集団的な学習の場として相応しい最低限の人数は何人かというのは色々とあると思うんですけど、そこは決めない方が地域の実情に応じて動けるのではないかということなんだと思います。他の顧問の先生方、何かご意見ございますでしょうか。

清水顧問　ちょっとだけ付け加えますと、ある程度それぞれ困ったのではないかというのがあるんだと思うんですね。例えば、2 学級という考え方はクラス替えできるよねとか、当然そういう考え方があります。そこのところ 2 学級が成立するということは、ある程度学級編成を考えると一定の子どもの数というのも想定できるわけですね。2 クラスになれる時というのは、どういう時かという一つの標準としてあるんですけど、今、自分でも雑談の中で思い出したんですけども、私は鹿児島県の教育委員会におりましたが、鹿児島県だと小学校の離島・へき地率が大体 45%、中学校 43%、島の中に島があるという、最近は整備されてきましたけども、道路事情があるために学校といっても船から船で通うしかない。島の中に島があるというのは、いろんな地域性も率直に言ってありましたし、ただそれから何十年経っている中で変化していったのは、道路は離島の中においても次第に整備されていった。ということで、整備されていく中で逆に離島の中での人口の偏りというか、ある程度利便性の高いところに皆さんが住みたがる。お店にしても何にしても。という中でまた集落の中での人の過疎過密みたいな問題が起きてきて、非常にいろんな悩ましい問題が多々あって、ただ正直に言いますと、段々段々みんな複式化していく。複式化していくということで、みんな愛着はあるんですけども、子どものために何か考えなければならないなということに次第になっていく。そういう状況の中で、いろんな鹿児島で、逆に言えば指導上の最大の課題は、離島・へき地という複式学級のハンディをどうやって取り戻せるか。そこに指導の機転がむしろあった。率直に言っていろんな意味で難しい。文科省の国のレベルで何人と定めるのがいいのかどうか、そこの問題だと思う

んですよ。ただ、大よそ何となくの感じは皆さん持っている、そういうことですね。

旭教育長　ありがとうございました。この問題はなかなか難しいので、一応、他の委員さんも聞いてみまして、また何かあったら後で皆で討議したいと思います。それでは酒谷委員、ご意見がありましたらお願いします。

酒谷委員　酒谷でございます。本当に今、先日から色々と会議の中で、少子化は本当に大変な問題なんですが、加賀市の今の学校規模の推移について見ますと、6年後には加賀市は600人余りの子ども達が減るんですよね。そうしますと、小さな学校約10校分が減るというかたちになるんですね。これは本当に大変な問題だと思います。そして、先日も小規模校に行ってきたんですけれども、アンケートを取ってみますと、父兄の方も子ども達も小さい学校ばかりにいるからそれがごく当たり前みたいになってしまって、今のままでいいとか、そういう考えが結構多いんですね。でも運動会とかに行ってみますと、本当に大きな学校は皆で一生懸命、1年生から6年生まで1つになってやっているんですが、小さい学校は「よーいドン」と言ったら終わってしまうんですよね。学校としては運動会も成り立たなくて、父兄の方が色々とゲームに参加したり、町民運動会も一緒にするという現状でございます。この少子化というのは、加賀市に限らずどこの地域でもあると思うんですけど、第一回目の検討会議の時に、寺西先生が能登の方は早急に統廃合なさったという話もお聞きしました。具体的な内容というのは全然お聞きしていないんですけども、本当にどのようにしてこの短期間でここまでのことができたのだろうかという、そういうお話もちょっとお聞きできればと思いますし、もちろん大変な課題もあると思うんですけども、その課題に対しての色々な対処方法ですとか、行政としてそのような時にどのような配慮が一番大切なのか、これだけはきっちり忘れてはいけないよという、そういう行政としての配慮というようなものも何かありましたらぜひお聞かせ願いたいと思います。よろしくお願いいたします。

旭教育長　それではご指名ですので寺西顧問、何か感ずるところがございましたらお願いいたします。

寺西顧問　ご指名に当たりまして、私の場合は実務としてこの統廃合にあったのは、教育長の時に高校の再編をやりまして、加賀方面は一切しませんでした。能登の人口が大変減少いたしまして、半分くらいに減らしました。大変評判を悪くしましたけれども、それでもできた暁にはやっぱりよかったなと言って、お世辞でもくれる人も結構いまして、特に先生方は非常に勉強しやすいんですね。専門科目が中学生は教科単位ですし、小学校は全ての先生が受け持ち

ますけども、そういうことで苦労した覚えがあるんですけども、大体この統廃合が起きるのは市町村の合併と同時に発生しているようでございまして、そもそも文科省の指導が市町村合併の時からスタートされたと思っていますけど、清水先生がおっしゃるように段々その指導の基準も少し地元優先のよう感じがしまして、小規模でも地域がそれで満足であれば、というようなかたちになっておりますし、かつては40人学級以上でございましたけども、それも40人以下のようになったと思っております。そういうことで県内の学校の適正化の例ですけれども、現在苦労しているのは志賀町にそういう動きがあると承っておりますし、輪島市柳田村が合併した時に、あそこはたくさん小さい学校がありましたけども、一斉に統廃合した記憶があります。それからあまり動きを見せていないのが、町長さんにお叱りを受けるかもしれませんけども、津幡町がですね、小学校が8～9校あるはずでして、非常に山間の集落が多くて地域的に不可能なのかなという思いもありまして、新しい道路もつけることができない。それではバス通学が難しいのかなと、具体的にお聞きしておりませんけども、そういうところが残っているのではないかなと。私の住まいは白山市ですけど、第1回の合併時に統廃合をやりました。白山麓に5村がありまして、そこも今は2村、3村が1つの学校に集約されているわけでございまして、統廃合をして問題は親、あるいはお爺ちゃんお婆ちゃんが、郷愁があるんですね。自分の学校の名前がなくなる。それを非常にかつては嫌われておりましたけれども、学校は子ども達の成長する場ですから、よくよくご理解いただければ皆わかってくれると思うんですよ。よく年寄りは説得してもだめで、納得させないといけないという話がございますけども、それはやっぱり色々なかたちでご説明し、子どもの将来のために納得していただくという努力は欠かせないのではないかなと思っております。僕が不思議なのは、加賀市はこれまでほとんどやっていないんですけども、今日いただいた耐震化状況を見ますとですね、残っている学校もありますし、補強済みの学校もありまして、老朽化・耐震化というのは文科省のお奨めで昨年くらいに助成があったはずなんですけど、ほとんどの学校が分離集合の形態をしたはずなんですけども、どうしてこんなことになっているのか。

掛山局長　加賀市の場合は、耐震補強は全て終わっているんです。補強したのは昭和56年以前の旧建築基準法に伴うものについて、あとは全て新基準の校舎だったわけです。統廃合が進まなかったのは、また教育委員さんからご意見が出ますけども、やはり地域コミュニティの部分で、なかなか昭和33年の9ヵ町村合併の形態がそのまま継続した。そういうところが進まなかった経緯だと思います。

寺西顧問　貴重なチャンスを逃がしたんですね。そういう意味ではね。だから僕は白山

市なんですけども、旧の名前の小学校はありませんわ。最近合併したのは別にして、ほとんどみんな名前が変わりました。変わりましたから郷愁がないんです。だからよその集落の 9 村の学校を合併する、そういうことになって新しい土地にして、名前もみんな変えました。そうしたらまた不思議でね、40 年前に私の住まいの山島村というところですけども、2 村とプラス 2 村の半分くらいが集結しました。新しい場所に学校を作ったんですよ。35～6 年経ってその学校が今度は狭隘になってきたんですよ。団地ができまして。僕の住まいから 2Km ほど遠ざかった学校が最近 1Km 近くなりました。またそこに新しい学校を作った。そして古い学校は地域に還元するというかたちで、コミュニティとおっしゃいますけど、むしろそういう意味での文化、スポーツ、あるいはその他のいろんな用途に市の方が整備した。そういう不満の残らないようにやっていますので、9 村の大きなコミュニティが元気にやっていますから、あまりコミュニティが大事だと書いてありますけども、仕方によっては新しい展望が開けるのではないかなと、このように思っております。勝手なことを申し上げます。

旭教育長　どうもありがとうございました。今、耳の痛い「チャンスを逃した加賀市」と、私も加賀市で生活していながらそう思います。私は旧山中町出身で、今は加賀市ですけれども、山中町にはへき地がございました。それを昭和 47 年に一気に 3 つの小学校と 1 つの中学校に山中では統廃合いたしました。

寺西顧問　いい例があるんだ。

旭教育長　いい例があるんです。ところが、その時の統廃合の条件を調べておりますと、複式をなくす。1 学年 1 学級以上になるにはどうしたらいいかということで、今では 3 学級しかない菅谷小学校ですが、大聖寺川のずっと奥の分校はみんな菅谷に吸収して複式をなくす。それから荒谷とか動橋川上流の分校やら荒谷小学校とか中津原分校はみな山中小学校へ統合した。原則何かなと思ったら、その時の山中は複式を作らずに学校を統合した。それを見て、加賀市を今見ているんですけども、寺西顧問のおっしゃったとおりチャンスを逃した。複式を残して現在まできた。そうすると他の複式になっているところも残さざるを得ない。そうしているうちに 6 校もの複式を有する地域ができてしまった。それも全校生徒 20 人を切る段階にまでなってきた。そすると、いくらなんでも運動会を見ていると、きめ細かな指導はできているんですけども、集団的な学習の場としては、切磋琢磨させ、潜在能力を引き出す場としてはいかがなものであるか。これは教育委員会の環境を整備する仕事ではないかという、3 年ほど前からこの討議はしているんです。先生方にもご意見をいただいてやはり市民に公表していかないといけないのではないかという現状でございます。

寺西顧問　バス通学ができる道路はもう完備されているんですか。

旭教育長　加賀市にへき地はございません。もう子どもが少なくなっているだけでございます。だから交通の便を、もう山中小学校がその例を示してくれましたから。でも今も山中の方はスクールバスが出ています。次は畑中委員、何かご感想と、先生がおられますので疑問に思っていること、あるいは何でも結構ですので。

畑中委員　はい。今の話の流れでいきますと、私はその旧山中町の出身で、統廃合が行われた昭和 47 年生まれで、私はそのへき地と呼ばれるところの出身ですから、小学校時代は峠を越えてスクールバスで通っていました。中学生の時は朝 7 時ちょうどの私鉄で町の中まで行って、学校まで歩いていたんですけども、まだ私が小学校の時代というのは、うちに水道もきていませんでしたし、道も砂利道で、でもそれでもやっていたんですね。去年から教育委員をさせていただいて、加賀市の現状というのを見まして、うちの田舎で 40 年前にやったことをなぜ今頃やっているんだろうというのが正直な感想でした。私自身が保育園の時は6人の女の子だけの同級生で、それが小学校に移って100人くらいの同級生ができたわけですけども、ここに『学校規模によるメリット・デメリット』の表がありますけども、少人数の子ども達の力関係の窮屈さも、大きい学校に行ってクラス替えがあって毎年違う友達ができる楽しさもやっぱりある。デリカシーのない男の子達に色々言われて嫌な思い出もありますけども、また別の地域から自信満々の転校生が来て、それが刺激になったりですね、自分よりいろんな面で生きる子とかを見て、こっちも頑張ろうという負けん気みたいなものもそういう中で育まれているように思いますし、あとは特に勉強というものを意識するのは小学校高学年とか中学生くらいになってからだと思いますけれども、同じ教科でも先生が違ったら好きになることもあると思いますので、同じ教科で特に英語とか数学ですとか、先生が複数いるような学校の方がいいのではないかなと思いますし、先生方にとってもその方がお互いに学びあうという意味ではいいと思います。実際に小規模校のメリットっていうのもあるでしょうから、私自身の経験しか言えないので、一概には良し悪しというのは言えないんですけども、私自身ちょっとずつ大きいところに移っていったのは良かったなと思います。私がスクールバスで通っていた小学校時代といっても、スクールバスには 20～30 人は乗っていましたから、今の過小規模校よりはよほど多いですね。だからできないことはいと思いますので、いい方向に進んでいったらなと思っております。

旭教育長　どうもありがとうございます。ご自分の体験から話していただきましたが、ちょっとはっとしたのは、複数の先生に習うということも大事なんだなと。

確かに小規模校は先生が固定される。子どもも固定される。人間関係も固定される。だけども、小規模校で育った畑中さんのような人も生まれる可能性がある。この辺の人材育成という観点からも、松田先生や笹原顧問の方からまた小規模校と大規模校の違いといいますか、では松田顧問からお願いします。

松田顧問　非常に難しい問題を短期に短い時間で考えるので的を得ているかどうかわかりませんけども、教育という大きな観点から言いますとですね、本来教育ということは、東京のど真ん中で教えていても金沢であっても小規模であっても内容は一緒なんですね。そこのところを忘れますとですね、人数合わせ、人数さえいれば良くなるとか、そういうふうな発想になっちゃう。一番重要なことは地域の学校とかそういうことじゃなくて、教育の文科省が定めている内容をきちんと子ども達が伝達を受けるということでしょ。だから学校をどうするかというのは市の一つの方針の中にあることかもしれないけど、子ども一人一人から見たら、大であろうと小であろうと都会であろうと田舎であろうと質の高い教育を受ける。あるいはそれを義務教育ですから受けさせる必要があるし、受ける義務があるということから考えますと、今、寺西顧問がおっしゃったように、せっかくのチャンスですから大英断を持ってですね、つづくり合わせではなくてですね、未来の子ども達がどう生きるかということをやっぱり本気で考えないといけない。その方針がないのにいくら学校規模の問題をやったってしょうがないというふうに思います。だからそういうふうに言うと、口幅ったいことですけどもお金がかかるからとか、そういう発想はやめて、かかるんですよこれは。投入すればいい。ただ例えば、これも言い過ぎかもしれませんけども、加賀市が病院に何十億という予算を注ぐ。これは現在生きている人にかけるんですね。学校教育といったら未来を生きる人に注ぐ必要なお金なんですね。それは私としては、国家もそうですけども、非常に現在の教育予算は少ないと思います。少ないという意味は、例えば小規模校じゃ子ども達は皆友達がほしいとこれだけ言っているわけですから、子ども達の要求を聞くためにはスクールバスを出して中規模校なりに入れないといけないわけでしょ。今さら過疎地に子どもが増えるわけがないんだから、そういう現状をつづくり合わせするんじゃなくて、一切破棄をしてですね、一番中心はやっぱり子どもの教育、未来の日本人の育成ということを考えれば、そういうことをやらなければいけない。例えばバスで運んでくるとかですね、やっぱりたくさんの人に揉まれていく方がいいと思います。しかしそう言ったって、加賀市でいくら揉まれたところで、世界全国に出て行けばもっと違う揉まれ方があるわけですから、私は小規模校でもいいと思うんですよ。さっき畑中さんがおっしゃったように、何人かでやったって別に悪いことはない。それをやる時には非常に重要な力のある先生を入れなければいけない。先生の入れ方は、現在は県で人事をやっていらっしゃ

るから地域性があるかないか別にして、一挙に全てできるわけではないけれども、やっぱり力のある実力のある先生が、小学生なり幼稚園も入れてると思うんですけど、そういう人材育成に関われば僕はすごいと思うんですよ。だから決して今皆さんがここで問題にしていることは的外れはないと思うけれども、何かその地域の大人たちに遠慮し過ぎているような気がする。寺西さんがおっしゃったように、学校の名前を変えることなんてすごいことですよ。当たり前のことだと思うけどね、それは地域の名前しか持ってないということはおかしいわけで、未来のある希望のカモメ高校でもいいし、皆して付ければいい。要するに今の、金沢にいてもそう思うけど、校区とか校下とかそういうことを一生懸命考えて何か狭いところで物を考える。これは文化の問題ですね。文化というのは、一人一人の生活とか地域の生活とか積み上がって出てくるもんなんですけど、学校教育は文化じゃなくて文明なんですよ。学校で教えていることは世界に全部一挙に通じてしまうことですね。2 足す 2 は 4 ということは山中だから違うんだとかね、大聖寺だから違うんだということはありませんよ。どこ行ったって 2 足す 2 は 4 なんです。それは文明が教えていることなんです。これは文句なしに教え方によってはどんな場所でも入っていくわけですね。しかしそれはあんまり言うとせっかく今日の話題ですから、私はこの表を見て友達がほしいという切実な要求に市としてぜひ応えるべきだと。こんな涙ぐましい要求はないですよ。終わり。

旭教育長　ありがとうございました。はっとする本当にいいご指摘ありがとうございます。本当にそう思います。未来の子ども達にどう働きかけるかが、我々教育委員の仕事である。笹原顧問は何かございますか。

笹原顧問　お話を聞いていてですね、個人的体験をお持ちの方も多いですが、私も小学校 4 年の時に山代に変わってきて、それまでは岐阜におりまして、複式学級で同級生が 3 人ということで、これは濃密な先生との関係で、先生が 2 人いたんですけども複式ですから。これ夫婦なんですね。1 年から 3 年までずっと変わらずその夫婦が我々の面倒を見て、同級生 3 人ですから 3 人いればできる子、普通の子、できない子と分かれて僕は真ん中だったんですけど、男の子が 2 人いて、できる子が 1 人男の子で、普通が僕で、点数だけでできない子というかね、そうするとやっぱりできる子の方についつい先生も目がいくわけで、結構小学校 3 年間ひがんでいたような気がして、逃れ場所がないんですね。先生が 1 人か 2 人しかいないから。さっき畑中委員から話がありましたけども、やっぱり先生も多数いると逃れ場所、山代小学校に変わってきたら今度はひどい生徒もいれば、できる先生もいれば、何かいい加減な先生もいるようなすごいところだなと思いましたが、逃れる場所があったり、声を掛けてくれる先生がいたり、お前何しとるんやとかっていうそういうところでほっとしたり、あるいはこの濃密な関係がいいと、全教職員による各

自の一人一人の把握がしやすいとか難しいとか書いてありますけども、今度大規模校へ行ったときに、当時は6クラスあったんですけども、いわゆる自分、今までの濃密な関係から少し希薄化した、何ていうか大人になったような、少し先生の目が完全に行き届かないところに行っていると、自分は悪いこともするけども、でもしっかりしないといけないというような責任感が出てきたような4年生からの感じがいたしました。思うのはですね、さっき松田先生もおっしゃいましたけども、学校というのは全部大人の都合です。この議論も子どもがいないからなんですけど、大人の都合で決めているところがあってですね、これも皆さん振り返ってみればわかるんで、学校を普通の人が考える時は自分の子どもが受験するときか、小学校に入れるか中学校に入れる時か、途中は何も考えないんですね。途中、自分の直接な肉親が関わっていないと、親戚の子とかは関係ないんで自分の子とかが関わっていないと学校のことは何も考えない。どうでもいいと言ったら極端ですけども、その瞬間に山代小学校出身だから山代小学校がなくなると困るなとか、山代中学校はでかいから他を吸収してしまえばいいやとか、勝手なことを言っていて、自分の子どもが関係してくるとやっぱりということになるわけで、その辺のところはですね、一律に例えばアンケートを市民に取ったりすると、濃淡が出てくると思うんで、ここはもう大英断でやっていくしかないんだろうなと。少々強引なことでも。これを見るとですね、加賀市というのはやっぱり遅れているというような話がありましたけども、結構大聖寺地区が残っているんですね。小規模校で海辺の町も色々ありますけども、そうすると我々というか皆さんもそうでしょう。こうして見ると大聖寺の政治家の人は皆強かったのかなとか、山代って結構ふにゃふにゃしていたんだなとか、山中は1町だから上手くいったんだろうなとか、山代はふにゃふにゃしてて、大聖寺は、「いや我こそは」という感じで、やっぱり十万石のプライドがあって残ってきたのかなとか、いろんな大人の下意がちらつくわけですから、今回はそういうのがちらつかないように、ぜひとも大英断していただきたいのと、それからどうも日本というのはスクールバスに抵抗がありますけども、アメリカなんかはほとんどスクールバスですよね。あと子どもも1人で絶対に学校に通わせない。その地域の安全性とかありますけど、絶対に親が学校まで送っていくか、日本では過保護と言われますけれども、アメリカとか行くともうしょっちゅう黄色いへんてこな安そうなバスを見ますけども、ああいう状態に日本人も近づいていくしかないんだろうなと。向こうの国土は広大ですから。ここはスクールバスをどんどん活用すべきだと思うし、加賀市の規模からいくとですね、白山市から見ればずっと小さいわけですから、むしろ逆に言うと駅前に1校作って全部スクールバスで順繰りに回って集めたってそんなもんですよ。それくらいの世界規模の地域からいけば、アメリカの地域からいけばその程度の広さなんで、朝7時から山中から順番に回って片山津を回って拾って真ん中に連れてきたって8時半には着くっちゅうもん

ですから、9 時から授業を始めればいいんで、そのくらいの気概を持ってやっていただければなというふうに思うので、また事務局の方も委員の方も、あんたら何考えているんだと足引っ張られると思います。自分の学校がなくなるのに何とも思っていのかと、でもあんたらの都合だろうと、子どもらは別に山代小学校に入りたくて入ったわけでなくて、出る時に山代小学校を出たと思って出るだけだから、新しい学校ができて入ってきたら、出る時に例えば加賀小学校なら加賀小学校に入れば親しみを持つわけですから、自分らの先行きのないノスタルジーよりも子どもらのノスタルジーを大事にしていきたいと思います。

旭教育長　どうもありがとうございました。笹原顧問のおっしゃる通りなんです。清水顧問もおられますけども、文科省の決めた標準で加賀市を一回新名称にしましたら、21 小学校が現在ありますけども、8 つか 9 つでいいんです。だから半分以上統合しないとできない。中学校は 6 校なんですが、5 校くらいで。ただし、橋立小中学校は連携校を作ってしまいましたもので、中学校はあれが最低基準校になりますもので、もうあとはいらえません。小学校だけやはり大英断と言われましたけども、これもガラガラポンにして、じゃあどこに建てるのかとか、笹原顧問は 1 校でいいとおっしゃいましたけども、なかなか現実そこまでは難しいので、どのように地域の方々に納得してもらえるか、その英断は迫ってきております。そこで、ちょっと時間もありませんので、最後上田委員から何かご感想とかご意見ございましたらお願いします。

上田委員長　4 人の顧問の先生方、本当に私ども未熟な者にとっては大変素晴らしい、いろんなお考え、ご発想、ご意見を述べていただいて、とっても参考になりました。先ほどご説明を申し上げましたように、加賀市は離島もへき地もないわけでございます。そんな中で小規模校というのが 12 校、過小規模校が 6 校、他の市町と比べると多いのではないかということがもちろん言えるわけですけども、小規模だから決して悪いというわけではありません。そこのアンケートにもございましたように、大変きめ細かな指導をしていただいているというので、児童も保護者も大変喜んでいるという結果も出ております。そういった点で、その中でも特に完全複式となっている 2 校ございますが、先ほどもいろんなお話の中にも出てきましたように、子どもの数はもちろん少ないのですが、先生にしても校長先生 1 人、教頭先生 1 人、ホーム担任の先生が 3 人、養護教諭が 1 人、そういうような状況なんですね。いろんな意味で確かに行き届いた指導はなされていると思います。そういう点に保護者は感謝といいますか、喜んでいるわけですけれども、それだけではない。やっぱり集団的な指導であるとか、あるいは子どもの社会性であるとかという点で考えると、やはりそうは言いながらも保護者も人数が多い方がいい。2 クラス以上がいいという思いもあるわけでございます。私どもはそういう意

味ではこの状況を何とか改善していきたいという思いを5人の委員全員が持っているわけですけども、そんな中で、じゃあどこで線を引いたらいいかといいますか、その辺りが色々と議論が分かれたりする部分もあるわけでございます。もちろんチャンスを失したということも十分わかっておりますし、その中で我々が取るべき道というのを模索していかなければならないわけなんですけれども、ただ、言えることはこれからますます 1 年に 120～130 人ほど生徒が減っていくわけです。ですからこれはやはりぜひとも早急に取り組んで検討し、その結果を公表していくという話で私どもは進まなければいけないと思っているわけでございます。その辺りにつきまして、ご意見をお伺いできたらと思います。

旭教育長　それでは、この問題につきましては最後4人の先生方に一言ずつお願いしたいと思います。清水顧問お願いいたします。

清水顧問　先ほどは石橋先生からの質問にお答えするだけでご意見を申し上げておりません。私の経験から言えば、そういう離島、歴史という条件の中でも複式学級というその辺ハンディがあるんですね。複式学級をどう解消していくか、最初のステップになるのは間違いない。できる状況があるならそれはするべきだ、これが私の考え方。できる状況というのは、例えばアクセスの問題とかですね。複式というのはステップがあるんですね、実は。学校を取り巻く状況はどんどん変わってます。その中で特に学校と新しい知の世界を開いていくことと同時に、やっぱり社会性・集団性を陶冶していく大事な場ですから、そこである程度の友人関係とかその辺り、ここでアンケートを見るとつくづく痛切に見えます。教育の基本のそこのところから、松田先生が言われたように考えていくのだろうなというのが一つ。ここが唯一無二の論点であろうと。2点目としてちょっと気になりますのは、実は5年後の増減なんですけども、通常推計ですと 2030 年頃まで人口出生推計の割合出ていますけどありませんか。2013年から2020年、2030年頃に推計するとだいたい出生率推計でこれくらいになるはずだろうというのが出ていませんか。

旭教育長　それはコンピューターに出ていました。

清水顧問　いいんですけど、この状況はおそらく5年後どころの状況ではないと思います。だから結局、50 年代 60 年代から平成について、この間のギャップがあるわけですから、この 2030 年を念頭においた、ある程度計画的な体制というものを考えて、そしてそういう中で、実は私は耐震化が3点目としてすごく気になっていたんですけれども、寺西先生がおっしゃったようにチャンスを逃したねというのはおっしゃる通りだと思います。どこの地域でも統合とか耐震というのを契機に補強だけではなくて新しく、それと同時に新しい学

校づくり、地域との関係も含めて、例えば橋立小中学校を今日見させていただきましたが、コミュニティスクールだとか小中一貫だとか、いろんなかたちの小学校は小学校、中学校は中学校という区切りを超えながら、あるいは高等学校まで射程に入れてというのが今あちこちで動いているんですよね。2 点目としては、教育委員会としてもっと先を見越していかなければならないし、保護者の方々、地域の方々にはもっとそこを考えてもらった方がいいなというふうに思います。3 点目として背景の状況で言えば、少子化という状況は 30 年前に何も考えてなかった。30 年前だと日本は貿易立国だと皆思っていた。貿易立国というか、国民総生産に対する貿易収支の割合で言えば日本は 180 ヵ国中、確か 140 番台か 150 番台、それだと中国よりも貿易依存度は下がってきている。これでは結局輸出、輸入いずれも日本はおそらく世界各国地域の中でずっと下位にある。これがグローバル化というんです。日本の企業は中小企業も含めてどんどん海外展開をし、海外展開をせざるを得ないからしているだけでそうなっているし、それは今度、雇用の場とか就業という問題も、学校関係者が目の色を変えてグローバル化と言い出したのは、企業とか産業とか貿易とか収支の在り様、かたちが 30 年前からガラッと変わったというだけなんです。だって結局子どもはいずれにしても 30～40 年後にはいよいよ働き盛りの世代になっていくわけですから、ということを考えなければならないし、そういうことをきちんと地域の方々にもご理解いただきながら、加賀市をどうしていくかということなんだろうと思うんですね。そこがこの議論の中で一番気になっております。

旭教育長　ありがとうございました。それでは寺西顧問お願いいたします。

寺西顧問　僕は行政マンですから単刀直入で恐縮ですけども、議会とか PTA とか色々と評価ありますけども、子ども達は育つわけですから、今決めても 3 年後に学校ができるか、そういうことになりますから、PTA だけでなくて中学なりよその団体とかいろんな方の総合意見をまとめないと、おそらく最終的にはできないのではないかなと思うんですけど、議会の動きも我々説明を受けていないんですけども、議会は全く無頓着ではないと思うのですがどうなのですか。

旭教育長　議会には何にも働きかけておりません。

寺西顧問　質問も出ない？

旭教育長　質問も出ません。

寺西顧問　現状満足ということですか。

旭教育長　現状満足というか、やはり議員の後ろに地域がそれぞれついていますから、おそらくは複式を要する学校の地域の議員は心配されている。質問すると火に油を注ぐかもしれないのでしないのか、質問を受けないからこちらも喋らない。その膠着状況がずっと続いている。どちらが先に言い出すかというこんな状態でないかと。私達教育委員会は、子どもの切磋琢磨し、松田顧問も言われた友達がほしいという切なる思いを叶えてあげないといけない。だから我々の方から言ったっていいんじゃないかというのが我々5 人の中では話している。清水先生、寺西先生、松田先生、笹原先生がおられるから、この先生方にも聞いて、早急に環境を改善してあげないといけないのではないかというのが今の現状です。議会では今のところ質問がありません。

掛山局長　すみません、過去にやはり統合の話は何度か出まして、その当時の首長さんはそういう意気込み、教育委員会はそういう意気込みで取り組んだ時期も一時あったんですけども、全て地域の市会議員の方から色々お話があって、その時点で諦めた時期もございます。だから議会の議員さんに対するお話がなかなかしにくい現状だったんですけど、今はこれを機会にということです。

旭教育長　私が教育長になってからはないということで、ただし、今教育委員会の体制そのものも教育再生会議、国の方の会議等で、そのあり方が検討されております。我々も『動く教育委員会』、『開かれた教育委員会』を目指していろんなところを視察したり、教育委員会同士で交流しております。一番手っ取り早いのは同じ温泉地域で、隣の福井県です。あわら市に交流しようということで、あわら市の教育委員会と我々加賀市の教育委員会は交流いたしております。やっぱりあわらも地理的に一緒ですから、過疎化の問題があるんです。特に石川県と福井県の県境に吉崎というところがあります。加賀吉崎と越前吉崎というのがあって、1 つの町が 2 つの県にまたがっているという場所がございます。そういうことで、去年あわら市教育委員会とあわら市へ行って交流した時にそういうお話をしたら、政治的なものがございまして、あわら市の場合は選挙があったんですね。そしたらどんなに小さい学校でも 1 人であっても学校は統合しない。あそこに吉崎小学校というのがあるんです。川を挟んでこちら側には緑丘小学校がある。緑丘小学校には 40～50 人いるんですが、吉崎小学校は 20 人切っているんです。今の黒崎小学校と同じなんですけれども、あわら市は残すと、市長さんのそういう政治方針ですから、そういう地域もあるのかと。我々5 人で三重県伊賀市まで視察に行ってきましたけども、伊賀市はガラガラポンにして複式を作らない学校づくりで 20 年 30 年計画でやっている、そういう地域もございます。そういうことから色々と斟酌いたしまして、加賀市として現状複式が 6 校あるわけでございまして、どうしていったらいいのか、ああでもない、こうでもないと言って時間は過ぎていっているんですけども、今日も午前中に保護者から電話がかか

ってきました。いつ統合してくれるんだというような、過小規模の学校の保護者でした。在校生でした。来年小学校1年に入るのに迷っていると、小さい学校できめ細かく指導してくれて学力も高いと聞いているけれども、やはり子どものいろんな諸行事を見ているとかわいそうであると、保護者から電話がかかってきました。最後は保護者に決めてもらわないといけないのですが、こういう状態、私が教育長になってこれで4年目ですけども、毎年そういう電話がこの時期にかかってくるということは、笹原顧問が言われたように英断をしていく時期がきているという現状でございます。私ばかり喋っていてはいけないので、寺西顧問は。

寺西顧問　議会がそういう状況なら教育委員会のリーダーシップが一番発揮できる、いいチャンスです。

旭教育長　我々委員一枚岩だと思っておりますので、議論はしていきますけども、それでは時間もないので申し訳ないですけども、松田顧問お願いいたします。

松田顧問　私は本当に局外的な教育だけの立場でしか発言できないんですけども、先ほど言いましたように今の子ども達の問題ではないんですね。これはしょうがない。このままいかないといけない。そうすると何年後の子ども達か、何年後を目指していくのか、そこのところを早く市の教育委員会の方で考えてその措置をするんですね。今、議会とおっしゃいましたけど、議会なんて最大4年で変わるわけですから、そういう人に相談したら必ず現状の意義を問うに決まっています。それは子どもには関係がないんですから。むしろこれから結婚するとか、そういう青少年の人達が自分の子どもを加賀市で教育を受けさせたら素晴らしいというようなかたちのものを考えておかないといけない。今すぐの手当てとは考えない方がいいと思っているんですよ。長い将来、しかしその長い将来というのは日本がどう変わるかわからないし、様々な影響があると思うんですね。文科省だってどういう教育方針を出してくるかまだわからない。今大切なことは、さっきちょっと言いましたけどもつづくり合わせではなくて、世界に通ずる人材を加賀市がどうして育成するかという、もっと大きな観点で考えていただけたらと思うんですね。それは何も加賀市だけでなくて、どこの市町村でも皆あるんですよ。地域性は皆持っている。だけどつい当面のことだけを、言い方は悪いけども耐震、校舎が潰れないということだけを考えていてはいけないんですね。例えば今の学校一つ廃校にすれば、そのお金はバス代にうんと使えるわけですよ。お金なんてどうしても出るんだから、問題は対極的に教育の意味というものを現在においてどう考えるかですね。昔からの教育の意味はグローバルになったこの時代ではあんまり使えないと思うんですね。だから文科省だっていろんな制度を変更しているわけでしょ。私は現在の状況よりも近未来、あるいは中未来と

いうのは焦点だと思います。そして、これが全国のどこの市町村でも抱えている過疎問題があると思うんですね。だからそういう意味では常にいろんなことを考えていらっしゃる全国市町村があるかもしれませんけど、加賀市は全国レベルの発信ができると、これは我が市の教育の本道であるというふうな意気込みでやられた方が、小さいことを言っているよりもいいのではないかと。その方が多くの市民は納得すると思うんですよ。悪いことをしようと言っているんじゃないんですから。より良いことをやろうっていうんですから、それをじゃああんたどう考えるかということですね。先ほどもおっしゃったように、自分の子どもがいた時だけしか言わない。本当に。出てしまえばもう知らん顔ですよ。この長い教員生活でわかります。そういうもんです。だから、教育委員会というのはそれをもっと凌駕した存在だと思うので、エールを送って、頑張ってください。

上田委員長　ありがとうございます。

旭教育長　ありがとうございます。それでは、最後に笹原顧問お願いいたします。

笹原顧問　多分、四面楚歌になると思いますけども教育委員の皆さんには頑張っていただいて、独立ですから政治家からも一切干渉を受けずというのが基本なんで、いろんな問題で全国の教育委員会が叩かれていますけども、これをやることによって気概が出ると思いますので、ぜひとも頑張っていただきたいというふうに思っております。今、松田先生もおっしゃいましたけども、1 つ 2 つ統合するとですね、そのお金が浮くわけですから、それを違うところに回すという発想でやっていただきたいのとですね、びっくりしたんですけども山代小学校って、まだ便所棟というのあるんですね。昭和 36 年に建っている便所棟というのを見て、ここも耐震化が終わっているようですね。便所だけの建物があるんですか。

掛山局長　校舎にくっついているんですけども、棟としては分かれているんです。ただ、校舎の渡り廊下があってエキスパンションというか、一棟に見えるんですけども建物としては別構造ということです。

笹原顧問　あとですね、拙い提案ですけれども、月に 1 回とか 2 月に 1 回くらい普通の授業は進み方が違うので一緒にできないのですが、体育の時間、例えば 5 限目とか 4 限目とかその日の最後の日に決めて、想定される、ここで言えば大規模中学校の校下の小学校が 1 ヵ所に集まって、半年に 1 回でもいいですかね、やっていけば徐々にそういう雰囲気というのが、子ども達も楽しかったとか、友達いっぱいできたよとか、あっちと一緒になりたいという子ども達が自然発生的に湧いてくるんで、今ここで決めたってできるのは 5 年後とか

6 年後になってくるんで、今の子ども達には何のメリットもないんで、今の子ども達が少しでもメリットが受けれるような、そして子ども達もですね、「こうするといいよ、お父さん、お母さん。」というのを、子ども達自身から発言ができるような、そういう機会もバス 1 台チャーターすれば小規模校全部回って乗せたって時間がかからないですから、そんな手立てもいいんじゃないかなとふと思いました。普通の授業はなおいいんですけど、これは進み方が全然違いますんで、一緒にテスト受けさせてもいいんですよ別に。放課後の時間だけ一緒に遊べばいいんで、先生がついていって、そうすると先生も刺激を受けるでしょうし。それから小規模校のですね、よく面倒を見てもらえるとかそういうご意見はよくわかるんですけれども、先生出身ばかりで申し訳ないんですけども、先生が皆当たりとは限らないんでね。時々ひどいのがいますんで、それとお付き合いした日には 3～4 年間ずっとお付き合いしないといけない。さっきも言いましたけども、その辺のデメリットもですね、いいことばっかりですね、濃密でいいとおっしゃいますけども、最低だというのが 3 年間という不運もある。子ども達にとっては喜んでいる子どももいれば、悲しんでいる子どももいて、喜んでいる子どもが声を大にして 3 年間いけるけども、悲しんでいる子どもは何も言えなくて苦しみの中で 3 年間過ごしていかなければならない。どこにも逃れられないという事実も若干あるということをご認識いただきたいなというふうに思っております。濃密ばかりがいいのではないんです。

旭教育長　どうもありがとうございました。生々しい現実、よくわかります。それではあと少ししかないもので、今までちょっとこれは言っておかなければならないとか、質問等ございますでしょうか。感想などを聞いたわけですが、まず教育委員どうでしょうか。石橋委員ないですか。

石橋委員　聞きたかったことはすでに顧問の先生方からのお話で出ましたので、私はもう結構です。

旭教育長　酒谷委員どうですか。

酒谷委員　今の笹原顧問さんのお話を聞きまして、本当に小規模の先生から前に伺ったんですけども、1 年から 6 年まで 1 クラスしかないんですね。1 年から 6 年まで頭の良い子は 6 年間頭が良いって言うんですね。悪い子は 6 年間、足の速い子は 6 年間、それが大人になってもその人間関係が続くって言ってらした先生がおいでました。本当に今そのことを思い出して、大変なことだなとつくづく思いました。

笹原顧問　ずっと頭が上がらないです。コンプレックスで。自分ではね、中学校、高校時代にそいつを抜いたつもりでいるんですけど、離れていますからね。そい

つと今でも会うと頭が上がらないです。

旭教育長　畑中委員どうですか。

畑中委員　私、先を行かないといけないなとつくづく思いました。貴重なご意見ありがとうございました。

旭教育長　顧問の先生方から何か。後で事務局から今後の予定を言われると思いますが、また3ヵ月くらいの後になると思うんですけども、今度はまたテーマを変えまして、何かこれはというようなことで言い残したことは。清水顧問いかがでしょうか。

清水顧問　後で教育委員会の方に文科省で事例研究をまとめた物がありますので、それをメールでお送りしますから、どうぞご覧になってください。

旭教育長　寺西顧問いかがですか。

寺西顧問　同じように、インターネットを色々調べるとですね、苦労した市の実例がたくさん出ています。もう見られていると思いますけど、いい物もあります。

旭教育長　それでは、松田顧問さんお願いします。

松田顧問　教育というのは、非常におめでたく物を考える必要があると思います。どうせ人間の考えることですから、後々考えるとしまったということが出てきますけどもね、でもやっぱりリーダーや先へ行く人はものすごく大きく理想的にそういうことを信じて、先生もそうなんですよ。こんな奴はどうにもならんと思ったらだめなんで、未来の可能性を信じながら教育しているわけですから、やっぱり制度もそういう未来の可能性の中で物を考える。こんなことになったら困るとか、そういうマイナス要素がもちろんあるんですけども、それに負けてしまうと何も進まない。だから非常におめでたく考えるのがいいと思います。

旭教育長　どうもありがとうございました。それでは、最後に笹原顧問。

笹原顧問　大丈夫です。

旭教育長　本当にありがとうございました。まだまだお話は尽きないかと思うんですけれども、先ほど清水顧問や寺西顧問が言われたように、現在便利な世の中です。メールとか色々ありますので、もしもお気付きの点ございましたら、メ

ール等、またご教授いただければと思います。あと我々教育委員の方も先生方にぜひこれは聞きたいということがありましたら、事務局を通しましてですけどもメール等でご質問させていただくかもしれませんが、今後ともよろしくお願いします。それでは、本日は時間もまいりましたので、最後に当委員会上田教育委員よりお礼の言葉をお願いしたいと思います。

上田委員長　顧問の先生方には本日、教育体制検討会議にご出席をいただきまして本当にありがとうございました。特に私どものいろんなご質問に大変丁寧にお答えをいただきますとともに、大変貴重なご意見、ご提言をいただきまして、大変感謝をいたしております。心からお礼を申し上げたいと思います。少子化による児童数・生徒数の減少というのは、加賀市だけに限ったものではございませんけれども、先ほど申し上げましたように過小規模校を多く抱えている加賀市ですので、そういう意味ではこれから教育の提供体制を見直していくということが喫緊の課題であると私どもは考えております。この検討会議での議論を踏まえまして、加賀市の教育委員５名の合議によって、次世代に夢を与えることのできる教育体制を慎重に検討し、子ども達の減少によって適切な集団教育の提供に支障をきたすことのないように議論を尽くしてまいりたいと考えております。本日は本当にありがとうございました。

旭教育長　どうもありがとうございました。それでは本日の加賀市教育体制検討会議、これをもちまして閉会とさせていただきます。事務局から事務連絡ありましたらお願いします。

掛山局長　今日は本当にありがとうございました。早速なんですけれども、次回は 12 月頃の開催を予定させていただいております。テーマを「地産地学」ということで考えておりますので、また事前に資料を送付させていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。以上でございます。

旭教育長　ありがとうございました。寺西顧問が申されましたように、これは公開の場として設定させていただきましたので、おそらくはこれをきっかけにして、議会等、教育民生委員会等でこの問題については質問が今後あがってくるものだと思います。これでいいんだと思っております。またご支援のほどお願いをして本日はこれにて解散とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

以上、会議の顛末を記載し、会議録を作成する。